

## 第 3 回都市行政ネットワークセミナー兼第 3 回先端都市学講座を開催

The 3rd Urban Administration Network Seminar  
And The 3rd Leading-Edge Urban Studies Seminar

2017 年 11 月 29 日（水）、西成プラザにおいて「第 3 回都市行政ネットワークセミナー兼第 3 回先端都市学講座」が実施された。「都市行政ネットワークセミナー」は現代の都市社会にひそむ社会的排除問題に立ち向かうアクションリサーチの育成に資することを目的とした講座である。理論と実践の邂逅をはかるため、都市研究と現場実践に取り組む研究者や都市行政の担当者が対話する場を設定してきた。「先端都市学講座」は、都市論関連分野の第一線で活躍されている研究者を招き、若手研究者などを交えての公開の議論を意図した企画である。今回、理論と実践の融合をさらにすすめるべく、両企画を同時開催した。

「空き家の福祉の活用」をテーマにした今講座では、現場からは大阪市住之江区役所保健福祉課より松永貴美氏、研究の場からは、居住と建築の関係について研究をすすめてこられた横山俊祐教授（本学工学研究科教授）を招いた。

まず、松永氏より住之江区における空き家等の現状について、住之江区では、区内家屋総戸数 68,300 戸のうち空き家数が 11,000 戸にのぼり、うち 1,560 戸が保安上危険、衛生上有害、景観を損なう等の状態にある「特定空家」予備軍という状態にあり、かつ、区内居住者の半数近くが空き家問題にまったく関心がないことが課題であるとの報告があった。ついで、これらの課題に対する主な取り組みとして、区東部エリアにおける重点調査や家屋等の情報整理、利活用にかかる施策が検討されているとのことである。また、住民等からの相談への窓口設置といった対応や、適正管理や活用にかんする情報発信および専門機関等との連携を行っており、新たな取り組みとして、既存の地域福祉のネットワークを活用しながら、「地域による人と家の見守り活動支援事業」をすすめているとの報告があった。

ついで、横山俊祐教授からは、「空き家の傾向と対策」と題した報告が行われた。まず、空き家発生の諸原因の説明にはじまり、空き家に関する苦情内容とその物的特徴などの解説などが行われた。ついで、福祉視点での空き家対策につい



松永貴美氏（上写真中央）と横山俊祐教授（下写真右）

て、名張市などで行われている「ネウボラ」や、「コ・ケア型地域づくり」などの紹介が行われ、空き家対策のめざすものとして、空き家の解消ではなく、地域づくりと連関する空き家対策であることが強調された。その後、二つの報告をうけて、阿部昌樹 URP 所長よりまとめが行われた。

なお、本講座はトヨタ財団 2017 年度国際助成プログラム「東アジア包摂都市ネットワークの構築—引き裂かれた都市から包摂型都市へ」（代表：全泓奎）の助成を受けて実施された。

■鄭榮鎮（URP 特任助教）

On the 29th November 2017 (Wednesday) the “3rd Urban Administration Network Seminar and 3rd Leading-Edge Urban Studies Seminar” was held. The “Urban Administration Network Seminar” provides a dialogue platform for researchers who engage in urban studies and participate actively in their field, and representatives of the city administration. The “Leading-Edge Urban Studies Seminar”, that took place at the same time, is a program that invites leading researchers in urban theory making to engage with young researchers in public debate. Under the topic “utilizing vacant buildings for welfare”, Takami Matsunaga from Osaka City’s Suminoe Ward Office, and Shunsuke Yokoyama (Osaka City University, School of Engineering) were invited as presenters. Many civil servants participated in this event, reflecting the importance of the issue.

## 船場博覧会 2017 Semba Expo 2017

2017年11月17日（金）から23日（木）までの秋の7日間、恒例の船場博覧会が開催された。大阪の歴史的都心である北船場の文化力を活かした同イベントは、今年で7回目を数え、都市研究プラザは初回から協力を続けてきた。

北船場で働く人たちを中心に構成された実行委員会によって、33件の多彩なプログラムが彼らの手づくりによって企画・実施された。特に北船場に数多く残る歴史的建築物を会場にした各種セミナーやまちあるきツアーは、このエリアならではのものといえる。例えば普段は非公開とされている明治時代に建設された町家の座敷を会場に催されたお茶会は、日本の伝統的な空間を体験できるだけでなく、船場で古美術商を営む茶人がお茶を点て、和菓子も江戸時代から続く老舗の和菓子店によるものが供されるなど、北船場の歴史と文化の厚みがあってこそその内容となっており、毎年大変に人気の高いプログラムである。また大阪の伝統芸能である文楽をテーマに、物語の舞台となった場所を辿って歩くまちあるきツアーでは、文楽に造形の深い船場の老舗店の主人が解説を担い、参加者は現代的な都市に変貌した街並みに、船場の歴史を重ね合わせた。

参加者は全体で延べ約2000名を数え、参加者アンケートは「とても良かった」「良かった」を合わせて90%を超える結果を示しており、大変に満足度の高いイベントとなっている。その主な理由としては「まちなみが魅力的」「文化・歴史が魅力的」と回答する参加者が多く、回答者の74%が「船場にまた訪れたい」と回答するなど、北船場が歴史的建築物をはじめとする文化・歴史の街として、一般にも認識されつつあることを窺わせる。船場博覧会は、茶道や文楽の他にも、華道や舞、能や老舗の伝統的な料理といった、大阪が誇る歴史的な都市文化に触れる機会を、広く一般市民に提供する役割を果たしているといえるだろう。

■高岡伸一（URP 特任講師）



北船場に残る最大規模の町家「旧小西家住宅」を会場にした茶会の様子



文楽の舞台となった船場の街を歩いて巡るまちあるきツアーの様子

During the seven days from 17th to 23th November 2017 the “Semba Expio 2017”, aiming to revitalize the Kita-Semba area, was held. It attracted about 2,000 participants. The event consisted of 33 different programs, involving guided town walks, concerts, and culture seminars in historical buildings. In a survey that was conducted 91% of the participants confirmed that it was “very interesting” or “interesting”, and most of them recognized Kita-Semba as “an area of culture and history”.

## ソーシャルワーカーのための出所者支援入門 Introduction to Ex-convict Support for Social Workers



私たちは、一昨年度から準備をはじめ、昨年度から本格的に「出所者支援ネットワーク (@東海)」という任意団体を設立した。本年度は、出所者支援にとりくむ者の顔のみえる関係づくりに焦点化し、『ソーシャルワーカーのための出所者支援入門』と題した連続学習会を実施している。

この連続学習会では、まず、刑事司法制度の全体像を把握したうえで、刑務所のなかでの生活を理解し、出所後どのような制度を活用していけばいいのか、どのように出所者と対峙していけばいいのか、ということ、それぞれの領域における第一人者を講師におむかえして、多様な専門性を有する参加者（刑務所の社会福祉士、地域生活定着支援センターの相談員、生活困窮者等の支援にとりくむソーシャルワーカー、弁護士、臨床心理士、学生など）とともに議論を深めてきた。

今後の学習会では、福祉事務所との連携をテーマにしたもの（2018年2月9日）、地域での支え方をテーマにしたもの（同年3月2日）が企画されている。出所者の支援にとりくむソーシャルワーカーの数はまだまだ少なく、孤軍奮闘せざるを得ないケースが多い。また、出所者支援は、困窮者支援との類似点も多いが、拘禁経験や刑事司法とのかかわりを踏まえた専門的な知識も必要となる。今後も、このような草の根の活動を通じて、出所者支援にかんする正しい理解と支援者間の緩やかな紐帯づくりを進めていきたいと考えている。

■掛川 直之（URP 特別研究員〔若手・先端都市〕）

There is still only a small number of social workers working with ex-convicts, and many of them have to fight a lone battle. Therefore, we founded the “Network for Ex-convict Support (in Tōkai)” aiming for a better understanding of ex-convicts and building up ties between supporters, and held a meeting of the study group “Introduction to Ex-convict Support for Social Workers”. In this continuous study group we deepen the discussion on ex-convict support together with the participants who bring a variety of expertise.

## 「包容力ある都市論の構築—『ジェントリフィケーション』への新たなアプローチを中心に—」研究会 Towards a Theory of the “Capacious City”: A New Approach to Gentrification

都市空間構造は、現代資本主義社会における経済・福祉制度の再編成などの相次ぐ変化に常に左右されている。特に制度面では、こうした影響への柔軟な適応性が問われている。本研究は、特定地域の多様な変化を分析対象として、コンテキストとローカリティへの着目により、都市空間の多様性や矛盾を取り込んだ包容力のある都市論の構想を目指しつつ、「ジェントリフィケーション」に対する新たなアプローチを試みるべく、定期的に研究会を実施している。以下、今年度分（計7回）のまとめである。

主に水内俊雄・コルナトウスキ・ヒェラルド(URP)が理論的展開を進め、「レジリエンス」や「ダイバーシティ」、「包摂都市」、「アライバルシティ」といった比較的最新の概念を切り口にすることで、様々なコンテキスト下でのジェントリフィケーション概念を再検討している。日本のコンテキストでは、大きな地域スケールでの政策的再編成は菅野拓(人と防災未来センター)と岡田真太郎(京都大学)がそれぞれ議論を行い、より小さなコミュニティスケールでは、クルムズ・メリチ(元URP)が大阪市堀江地区におけるエリアブランディング、全ウソフィ(UCRC)が宇治市ウトロ地区における空間的変容、陸麗君(URP)が大阪市西成区における新華僑の経営活動の実態、水野阿修羅(寄せ場学会)が飯場の新しい動き、木村優輝他(大阪市立大学)が大阪市地下鉄花園町駅周辺の住宅市場の展開、河西奈緒と土肥真人(東京工大)が東京におけるホームレスの包摂支援と社会住宅ストックを活用した都市地域づくりを明らかにしている。

東アジアのコンテキストは、コルナトウスキがシンガポールにおけるサービスハブの空間性、蕭閔偉(大阪市立大学)が地域によるホームレス支援に関する議論を行い、ヨーロッパのコンテキストはMagda Bolzoni(龍谷大学)がトリノにおける地域ブランディング、Uta Merkle(ルール大学ポーフム)が大阪における公共空間の最新傾向、コルナトウスキがブリュッセルにおけるルーマニア出身移住者の自助ネットワークを事例に、各地域へのインパクトを考慮している。

■ヒェラルド・コルナトウスキ（URP 特任講師）

For our 2017 research project, themed “Towards a Theory of the “Capacious City”: A New Approach to Gentrification”, we had a total of 10 speakers discussing current changes occurring in specific urban areas spread over different national and local contexts. The objective is to work towards a more encompassing theory which also engages with other forms of land valorization that don't necessarily lead to the exclusionary patterns of conventional gentrification processes.

## 日本・インドネシア文化交流 ジャワ舞踊を学ぶ Japan-Indonesia Cultural Exchange: Learning Javanese Dance



2017年11月23日に本学高原記念館学友会ホールにて表記のイベントが開催された。インドネシアのジョグジャカルタ市にあるインドネシア芸術大学伝統舞踊科の教員、ユッタ・ダルニ (Yutta Daruni) 氏が来日し、特別研究員として3ヶ月本学に滞在、その最終成果発表という意味合いのイベントである。インドネシア芸術大学は都市研究プラザと2006年に交流協定を交わして以来、研究・教育の協働をこれまで定期的に実施してきた。ダルニ氏はジャワ島の舞踊を軸としながらも現代的表現に取り組み、1996年には横浜ポートシアターの招聘ダンサーとして来日するなど、USA、ポルトガル、ベトナムなど世界各地で活躍している。今回の来日はインドネシア政府のSAME (Scheme for Academic Mobility and Exchange)によるもので、端的に言えばインドネシアのダンスを日本の大学で教えるというプログラムである。ダルニ氏と協議し、大学のみならず都市研究プラザのもつネットワークを活かして、大阪各地で様々な属性の人々に教えることとした。その成果を皆が寄り集まって披露したのが本イベントである。大阪市大生のほか、能勢高校生、花園高校生、釜ヶ崎の人たち、たんぼぼの家の人たち、ガムラン合奏団マルガサリといった多彩な人々が学友会ホールに集うこととなった。伝統的な古典舞踊から即興的なダンスに至るまで、ジャワ舞踊の幅広さが証左されたイベントとなった。

■中川眞 (URP 特任教授)

Yutta Daruni, Professor at the Department of Traditional Dance at the Indonesian Institute of the Arts, who had visited Japan for a three month stay at Osaka City University, presented at this event the results of her work. This time she had come to Japan in order to teach Indonesian dance at a Japanese University. Next to students from Osaka City University, also students from Nose and Hanazono High School, people from Kamagasaki, Tanpoponoye, and the Gamelan orchestra Marga Sari participated. By covering everything from traditional classical dance to improvisational dance, it was an event that showed the vast scope of Java dance.

### ■都市創造性コラム：Column for Urban Creativity

*Valletta 2018 Cultural Mapping: Debating space and place*  
CCS (City, Culture & Society, Elsevier), Vol.11 (Dec.2017)

この特集号は2018年が完成年であるEU文化首都のバレッタ (マルタの首都) で行われた学術シンポジウムの報告論文から編集された。マルタをはじめ英ウェールズの州都カーディフ、ポルト、地中海地域などが考察されている。CCSの前編集長であったF.Bandarin教授 (2017年12月までユネスコ副事務局長、2014年のプラザによる国際シンポジウムで講演) が主導したユネスコ創造都市ネットワークとの差異が見て取れる。CCS-Vol.10 (Sept.2017) のバルセロナ論文と比較されたい。同じく前年のバレッタでのシンポジウムから生まれた *Mapping Culture: Making the Intangible Visible*, Edited by Nancy Duxbury and Alys Longley (CCS-Vol.7-1 (March 2016) も好評であった。

大阪市立大学都市研究プラザ教授 (経営学研究科併任教授)

CCS Managing Editor 岡野 浩

1. [Introduction to Valletta 2018 Cultural Mapping: Debating space and place](#)
2. [Creative Cardiff Utilising cultural mapping for community engagement](#)
3. [Sense\(s\) of the city: Cultural mapping in Porto, Portugal](#)
4. [Changing urban identities on a discursive map](#)
5. [Meditations on the 'wrong place': Europe in Africa: Africa in Europe](#)
6. [Mapping the outcomes of a school-based cultural programme](#)

### ■イベント情報

#### ○第5回都市行政ネットワークセミナー 兼 第5回先端都市学講座

日時：2018年2月26日 (月) 18:30～

場所：大阪市立大学梅田サテライト

テーマ：台湾の現状について (仮題)

※本セミナーはトヨタ財団2017年度国際助成プログラム「東アジア包摂都市ネットワークの構築—引き裂かれた都市から包摂型都市へ」(代表：全泓奎)の助成を受けて実施するものです。

\*詳細は都市研究プラザウェブサイトでごらんください。

**URP**   
Osaka City University | Urban Research Plaza  
大阪市立大学 | 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、都市再生へのチャレンジとして大阪市立大学が2006年4月に設立した全く新しいタイプの研究教育組織です。「プラザ」という名前が示すように、都市をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。先端的都市研究拠点として、現場や海外での研究・まちづくり活動、さらに、世界第一線級の研究者や政策家と国際的なネットワークを構築しています。

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 tel.06-6605-2071

e-mail : office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp

所長 阿部昌樹 副所長 全泓奎 林久善

ユニット長 1U 阿部昌樹 2U 嘉名光市 3U 水内俊雄 4U 岡野浩

大阪市立大学都市研究プラザ ニュースレター 第38号

編集長 (発行責任者) 阿部昌樹

副編集長 全泓奎 水内俊雄 岡野浩

編集主幹 鄭栄鎮 波床尚美

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp>